

バルカン半島におけるルー マニア系言語

直野 敦

バルカン半島は地中海世界の東に位置し、当然、地中海文化圏の他の地域とは異なる発展の道を辿ってきた。古代世界没落後約四、五世紀以降の時代について言えば、最も大きな変化の一つはスラヴ族の進出によるバルカンのスラヴ化にあったと言ってもいいであろう。今日のバルカンについて考える場合に、ユーゴスラヴィア、ブルガリアという二つの南スラヴ人の国をぬきにしてこの地域の文化も政治も論じることが出来ない。また、古代から現代に至るまでその言語を維持してきた三つの民族、すなわち、ギリシア、アルバニア、ルーマニアの言語に南スラヴ語が大きな影響を与えていることも一般に認められている通りである。

バルカンの古代民族の一つであったダキア・トラキア族がローマに征服され、そこに伝えられた俗ラテン語が今日のルーマニア語へと発展してきたわけであるが、その過程で数世紀にわたる南スラヴ族との混住の結果、ルーマニア語はスラヴ語の強

い影響を受け、同じくラテン語から発展してきた西方のロマンス諸語（スペイン、フランス、イタリア語など）と対比した場合にこの言語を際立たせる大きな特徴の一つはそこに由来すると言ってもよい。しかも、ルーマニア語はこのような形で、スラヴ語の影響を受けたばかりでなく、バルカンの広い地域にわたって、スラヴ語が支配的になった地域で次第に消滅して行くという形でも深い影響を受けたのである。今日のルーマニア語はドナウ河の北岸に位置する古代のダキア地方に当る地域で話されているが、ドナウ河南岸のバルカン地域には、このルーマニア語と全く同じではないが、同一言語の方言と見なし得る程度の差を持つルーマニア系言語が今世紀の初頭までまだ残存していたし、今もその一部はまだ残っている。

これらのルーマニア系言語、また、これらの言語を話す住民の生活、文化の研究は、バルカン地域の歴史を研究する者にとっては大きな重要性を持つので、二十世紀に入って幾つかの研究が発表されている。しかし、複雑な政治状況の存在するバルカンでは、この種の研究は現在に至るまで様々な障害に妨げられて、十分な成果を得るに至っていない。特に、第二次大戦後は、この障害が大きかったために新しい現地調査はほとんどなされず、様々の研究は、一九二〇年代、三〇年代までの現地調査による資料をもとになされているのが実状である。

以下の小論では、ドナウ河南岸のルーマニア語圏について簡単に述べ、特に、その西部の一分派であるイストリア・ルーマニア語についてその消滅の過程を略述したいと思う。

二

二十世紀の二〇年代の研究の段階でバルカン地域に存在していたルーマニア語圏は、次の三つである。(これらの言語に対して、ルーマニア本国のルーマニア語はダキア・ルーマニア語と呼ばれるのが普通である。)

バルカンに居住するルーマニア人の中で最大の集団は、二十世紀初頭にギリシア西部のピンドス山地で牧羊を主な生業として生活していたア・ルーマニア人たちである。この時期の推定で約三十万人の人口があったとされており、経済的に豊かな層もあり、各地にルーマニア語の小中学校も存在した。しかし、第一次大戦から第二次大戦にかけての時期に、人口は激減した⁽¹⁾ものと思われる。

彼らがア・ルーマニア人と呼ばれるのは、彼らの言語で多くの名詞や動詞の語頭に接頭辞 *μ* が付けられることに由来する。また、彼らの居住範囲は、ギリシア国境を越えて、アルバニア南部、オフリッド湖東部のマケドニア地方にも及んでいるので、マケドニア・ルーマニア人とも呼ばれる。十九世紀末からは、ア・ルーマニア語の文法書、民話集なども出版され、また数人の作家も活躍した時代があった。ルーマニア本国では、バルカンにおける同族の大きな集団の言語であるから、十九世紀末以来、現地調査、研究、民話・民謡の収集などが行なわれ、その研究は現在も続けられる。ただ、くつかえし述べるように、第二次大戦後の政治情勢、国際関係の難しさから、新しい現地調

査はなされていない。また、恐らく、牧畜の不振、都市への人口集中、農村、山村の過疎化にともない、ギリシア側による同化の過程が急速に進んでいるはずである。この少数民族集団が今世紀の終りまで存続することはおそらく不可能であろう。

ア・ルーマニア語の起源については、専門家の間でも様々の意見があり、定説はない。しかし、これが、ローマによる征服の結果、バルカンに根を下した東方の俗ラテン語から発展した言語、すなわち、広い意味でのルーマニア語の残存物であり、かつて、ダキア・ルーマニア語と共通の言語であったことを疑う者はいない。ただ、このア・ルーマニア語とダキア・ルーマニア語がいつ分離したのか。また、この言語の担い手であるア・ルーマニア人たちがどのようにして、現在の居住地に達したのか、という点については論者の意見は大きく分れる。第一の問題について、原ルーマニア語、あるいは共通ルーマニア語は七世紀頃にはすでに成立していたという考え方から、十世紀に成立したという意見まで様々であり、また、ア・ルーマニア語が分離した時期も八世紀から十世紀までの幅をもって考えられている。ア・ルーマニア人の南方への移動は、スラヴ人の移住の波に押された結果と考える意見が有力であり、また、ア・ルーマニア人たちの生業——牧畜——が季節的移動を常とする所から、その移住も促進されたのであろうと考えられている。いずれにしても、ア・ルーマニア人たちの原住地はるか北方のマケドニア、あるいはセルビアに近い地域であったと推定されている。

第二のグループは、ギリシア北部マケドニア地方、ヴァルダル川の流域に住むメグレノ・ルーマニア人である。この名称は、この地方を指す地名のメグレノに由来する。ルーマニアの多くの学者は、メグレノ・ルーマニア人たちが、ア・ルーマニア人よりも遅い時期にダキア・ルーマニア人から分離したと考えている。⁽²⁾その理由の一つは、メグレノ・ルーマニア人たちの言語には、ダキア・ルーマニア語やイストリア・ルーマニア語と共通の要素が存在し、そのあるものは、ア・ルーマニア語には欠けているからである。例えば、オヴィド・デンスシアヌは、メグレノ・ルーマニア人を十世紀から十一世紀にかけてトランシルヴァニアの南西部から、ア・ルーマニア人居住地へ移住してきた人々の子孫と考えている。しかし、テオドル・カピダン、セクステイル・ブシユカリウ、アレクサンドル・ロセツティなどは、メグレノ・ルーマニア人たちがこの時期に移住してきたことは認めるが、ドナウ河の北岸からではなく、南岸のドナウ河とバルカン山脈の間の地帯から次第に南西へ進んで来たこと主張している。そして、ア・ルーマニア語との差異にもかかわらず、一方でこの両者に多くの共通点が存在することを根拠に、メグレノ・ルーマニア語とア・ルーマニア語が広い範囲に及んで話されていた共通ルーマニア語の南方方言を形成していたと主張している。メグレノ・ルーマニア人たちは今世紀の二十年代には約五万人の人口に達していたという説があるが、その後の人口推移は明らかではない。

第三のグループは、恐らく現在においては消滅してしまった

と考えられるイストリア・ルーマニア語のグループである。今世紀初頭の調査の時期でも、約五―六千人の人口であった。ユーゴスラヴィアの西部アドリア海に面するイストリア半島の幾つかの町村で話されていた言語であり、スラヴ語の大海の中に呑みこまれて消滅したルーマニア系言語の典型的な例である。

三

以上のように、ドナウ河南岸のバルカン地域には、古いものは約一千年近く昔に、ダキア・ルーマニア人たちの集団から分離して、スラヴ人、あるいはギリシア人の集団の中の民族的、言語的孤島として存続してきたルーマニア系言語、およびその言語を話す民族グループが散在している。現在、恐らくこれらの少数民族集団はすでに消滅してしまったか、あるいは消滅の寸前にあると考えていいであろう。それぞれの地域での消滅の過程が具体的に研究されるならば、歴史学、言語学、文化人類学など様々の分野で興味深い結果が得られると思うが、現実の政治的・社会的条件はこの分野の研究にとって必ずしも有利ではない。残念であるが、数少ない研究をもとに出来るだけその実状に迫っていく以外に方法がないであろう。

ここでは、中世紀の古文書、地名研究などをとくにイストリア・ルーマニア人を含む、ユーゴスラヴィア内のルーマニア人集団の足跡を研究したルーマニアの史家シルヴィウ・ドラゴミールの「中世におけるバルカン半島北部のヴラフ(IIワラキア)人」⁽³⁾という著書を参考にして、ドナウ河南岸のルーマニア

系住民の民族集団としての同化・消滅の過程を考えてみたいと思う。

中世セルビア王国の公文書の中にはじめてヴラフ人の名が挙げられるのは、十二世紀末であり、それ以来十三世紀、十四世紀には急速にヴラフ人名の記録が増え、十五、十六世紀になると、それが極めて少なくなる。そして、これらの記録から明らかなのは、十二・十四世紀には、現在のアルバニアとの国境に近いブリズレン、現在マケドニア共和国の首都となっているスコピエ、現在百万人に近いアルバニア人の居住するコソヴォ・メトヒア自治州の政治的・文化的中心地プリシュティナに囲まれた地方に、ほぼ十世紀から牧羊に従事するヴラフ人たちの村落がかなり密集して存在していたということである。それはさらにこの地方に多く残存する地名からも間接的に推定することが出来る。そして、地名の分布する範囲は先に述べた地方よりも、ずっと東および北の方にも拡がり、また西の方、アルバニアからダルマチア海岸へと及んでいる。そこには、ヴラフ人の民族名 *vlah* に起源を持つ多くの地名 *Vlaska*, *Vlase*, *Vlahinja*, *Vlaoije*, *Vlaska Livada*, *Vlaska Ckva* が残っている。Durnitor (動詞 *a dormi* (眠る) Visitor (動詞 *a visa* (夢みる) のような山岳名もある。これらの地名が様々な条件から考えて、南スラヴ人たちのバルカンへの進出の以前から、あるいは、少なくともそれとほとんど同じ時期から存続してきたものであることは明かである。ということは、十三世紀にこれらの地方におけるヴラフ人の村落の存在が、記録によっ

て確認されるまで、少なくとも、二、三百年の歴史を持つということを意味するであろう。そして、また種々の歴史的、言語学的データから、これらのヴラフ人はドナウ河に接し、モラヴァ川とティモク川に挟まれた地域から西および南の方向へ移動したと考えられる。先まわりして言えば、ユーゴスラヴィアにおけるルーマニア系住民、すなわちヴラフ人の最後の生き残りであったイストリア・ルーマニア人たちの言葉が、セルボ・クロアチア語からの強い影響にもかかわらず音声、文法構造の上で、ダキア・ルーマニア語に最も近いのは、ドナウ河を間に置きながらも、季節的移动によって絶えずドナウ河北岸のルーマニア人との接触が保たれていたからであると考えられている。ドナウ、モラヴァ、ティモクの三つの川に囲まれた地域に長期間スラヴ人以外の種族が住んでいたことは、この地域の西と東のスラヴ語に大きな差が生じたことから間接的に証明される。ツルナ・ゴラ (モンテネグロ)、ヘルツェゴヴィナ、ボスニア地方にも、南から移住してきたと推定されるヴラフ人たちが残した地名が散在し、特にドリナ川、リム川の流域には多い。しかし、記録で見える限りでは、ラグサ (ドゥブロヴニク) を中心とするダルマチア海岸の後背地に牧羊と荷物運搬 (特に岩塩の輸送) を主な生業として居住したヴラフ人たちの部落が多かったことが明らかとなっている。このヴラフ人たちは、ダルマチア海岸をめぐる当時の政治的・軍事的抗争でも兵力の一部として用いられ、それだけ記録に名を留める機会が多かったことも考えられる。

十五世紀—十六世紀におけるバルカン南部からのトルコの進出の結果、バルカン全体に大きな民族移動の波が拡がる。ヴラフ人たちも、この時期に大量にダルマチア海岸を北上し、その先端がイストリア半島に達したのであるが、この北上の波は何回にも及んだものと推定される。そして、十五世紀から十九世紀にいたる約四百年の間に、ユーゴスラヴィアの他の地域ではヴラフ人たちは南スラヴ人たちに同化されて、後には、ヴラフという単語は、民族名ではなく、羊飼いの職業を意味するようになり、また、クロアチアのカトリック教徒の間では「東方正教会の信者であるセルビア人」を意味する場合さえあった。

こうして、十九世紀初頭に、イストリア半島に数千人のルーマニア系住民が残り、彼らの言語がこの時点で調査、研究の対象になったわけである。

この時の研究をもとに、ルーマニアの言語学者ヨン・コテヤヌは「いかにして一つの言語が消滅するか(イストリア・ルーマニア語の場合)」という小冊子を發表している。その中で、著者はまずこの言語の基本語彙約四百語を考察して、両言語使用の結果、語彙においては、セルボ・クロアチア語およびスロヴェニア語の比重が増大して、例えば、「花、魚、金、銀、島、本、書く、走る」など一二八の単語がルーマニア語系からセルボ・クロアチア語起源の単語へ移行し、その結果、基本語彙の中では、前者の比重が40%、後者の比重が35%になっていると指摘している。文法構造においても、ルーマニア語に特有の後置接統定冠詞の消滅、名詞変化における子音・母音交替の消失、

かわりにルーマニア語に存在しなかった形容詞単数中性形の語尾^oの出現、動詞の完了体・不完了体の成立などを根拠に、コテヤヌは、イストリア・ルーマニア語が、ロマンス系言語であるルーマニア語と、スラヴ系言語であるセルボ・クロアチア語との混合言語に転化したと判断する。しかも、この言語が、社会的、公的な場から次第に家庭内でのみ通用する私的な言語へと範囲を狭められ、すでに成年男子によって使用されず、女子、未成年者の言語へと転化しつつあることを指摘して、死滅の一步手前にあることを予言している。恐らく、コテヤヌの予言は現実となり、イストリア・ルーマニア語は今日存在しなくなっているであろうし、メグレノ・ルーマニア語も死滅したか、あるいは、死滅の一步手前にあると思われる。ア・ルーマニア語について言えば、恐らくまだ消滅を免れてはいるであろうが、急速に衰退、消滅の方向へ向っていることは間違いない所である。こうして、二千年前にバルカンの地へもたらされた征服者の言語は、ドナウ河の北岸ではネオ・ラテン語のルーマニア語として定着したが、その南岸では、二十世紀に入って最後の段階を迎えて現在消滅しようとしている。

こうして、ルーマニア語、ギリシア語、アルバニア語圏を除いたバルカン地域のスラヴ化も最終段階に達したと言えるであろう。

(1) ア・ルーマニア人、ア・ルーマニア語については、次のような研究がある。

GUSTAV WEIGAND, *Die Sprache der Olymbo-Wal-*

- achen, nebst einer Einleitung über Land und Leute, Leipzig, Barth, 1888
- GUSTAV WEIGAND, *Vlacho-Meglen*, eine ethnographisch-philologische Untersuchung, Leipzig, Barth, 1892
- GUSTAV WEIGAND, *Die Aromunen. Ethnographische-philologische-historische Untersuchungen über das Volk der sogenannten Makedo-Romunen oder Zinzaren*, I: *Land und Leute*, II: *Volksliteratur der Aromunen*, Leipzig, J. A. Barth (Arthur Meiner), 1895, 1894
- PERICLE PAPAHAĞI, *Basme aromâne si glosar*, ed. Academiei Române, Bucuresti, 1905
- PERICLE PAPAHAĞI, *Graie aromâne*, Bucuresti, 1905 (*Analele Academiei Române. Memoriile Sect. Literare*, t. XXVII.)
- I. DALAMETRA, *Dictionar macedo-român*, Bucuresti, ed. Academiei Române, 1906
- GUSTAV WEIGAND, *Rumänen und Aromunen in Bulgarien*, in *Dreizehnter Jahresbericht des Instituts für rumänische Sprache*, Leipzig, 1908
- GUSTAV WEIGAND, *Rumänen und Aromunen in Bosnien*, in *Vierzehnter Jahresbericht des Instituts für rumänische Sprache*, Leipzig, 1908
- GUSTAV WEIGAND, *Die Aromunen in Nord-Albanien*, in *Sechszehnter Jahresbericht des Instituts für rumänische Sprache*, Leipzig, 1910
- MIHAIL G. BOIAĞI, *Gramatica română sau macedo-română*, reeditată cu o introducere și un vocabular de Per. Papahagi, Bucuresti, 1915
- TH. CAPIDAN, *Românii nomazi. Studiu din viața Românilor din sudul Peninsulei Balcanice*, Cluj, 1926
- AL. ROSETTI, *Cercetări asupra graiului Românilor din Albania*, Bucuresti, 1930
- TH. CAPIDAN, *Fărșeroții*, Bucuresti, Cartea Românească, 1931
- TH. CAPIDAN, *Aromânii, Dialectul aromân*, studiu lingvistic, Bucuresti, 1932
- (2) マン・ローニア人 マン・ローニア語の研究である。
- PERICLE PAPAHAĞI, *Românii din Meglenia. Texte si glosar*, Bucuresti, 1900
- PERICLE N. PAPAHAĞI, *Megleno-Românii*, studiu etnografico-filologic. Partea I, II, Bucuresti, 1902
- TH. CAPIDAN, *Meglenoromânii*, I: *Istoria si graiul lor*, II: *Literatura populară la Meglenoromânii*, III: *Dictionar meglenoromân*, Bucuresti, 1925, 1928, (1935)
- (3) マン・ローニア人 マン・ローニア語の研究である。
- SEXTEL PUSCARIU *Studii istorice*, in colaborare

are cu M. BARTOLI, A. BELUOVIĆI și A. BYHAN,
I: *Texte*, Bucuresti, 1906 II: *Introducere, gramatică, caracterizarea dialectului istroromân*, III: *Bibliografie critică, listele lui Bartoli, texte inedite, note, glosar*, de SEXTIL PUSCARIU, Bucuresti, 1926, 1929
(4) SILVIU DRAGOMIR, *Vlahii din nordul Peninsulei*

balcanice în evul mediu, Bucuresti, Ed. Academiei Republicii Populare Române, 1959
(5) ION COTEANU, *Cum dispăre o limbă (istro-română)*, Bucuresti, Societatea de științe istorice și filologice din R. P. R.

(東京大学教授)